

「この街と命と静けさと」

— 1 稿 —

2026/09/10

山極 瞭一朗

〈人物表〉

垂木 松良 たるき まつら (18) 高校生

竹邑 芽依 たけむら めい (18) 松良の友人

結城 暖 ゆうき だん (18) 松良の友人

垂木 茸地 たるき ふきじ (42) 松良の父

垂木 松良 (7) 松良の幼少期

1. (回想) だんじり小屋 (タ)

小屋の中に、大きな山車。

法被を着た垂木葺地 (42)、息子の垂木松良 (7) の頭を撫でて、

葺地 「この街に生まれた人間はな、だんじりに生き、だんじりに死ぬんや」

松良、よくわからずポカンとしている。

葺地 「それが男っちゅうもんや」

にこつと笑い、太鼓のバチを松良に握らせる。

松良、山車を見上げる。

2. 岸城城 (きしきじょう) ・ 外観 (タ)

天守閣をイチヨウの木が囲む。

淡く色づく葉。

どこからともなく太鼓や鉦 (かね)、篠笛 (しのぶえ) が混ざり合った一定のリズムを刻んだ音 (以下、「だんじりの音」と表記する) が聞こえる。

3. 葬儀場 ・ 外観 (タ)

煙突から煙。

4. 葬儀場 ・ 火葬場 (タ)

火葬炉の中、燃え上がる炎。

喪服姿の人々は沈痛な面持ちで顔を伏せている。

その中心に高校生の松良 (18)、じつと炎を睨んでいる。

隅にいる制服姿の結城暖 (18)、松良を見る。

松良、逃げるように立ち去る。

5. 葬儀場 ・ 休憩室 (タ)

松良、ドカッとベンチに腰を下ろす。ため息をつく。

結城、追いかけるように入ってきて、

結城 「親族お前だけやぞ。最後までおらんでどうすんねん」

松良、結城を一瞥 (いちべつ) し、

松良 「親父だつて、いてほしいと思つてない」

結城 「アホ、そんな親父おるわけないやろ」

松良 「いるよ、普通に」

結城、舌打ち。自販機の前に立ち、乱雑に金をいれる。ドリンクを選ぶふりして、

結城 「……せいせいしてるんか？」

松良 「あ？」

結城 「親父さん、だんじりから落ちて死んで、バチ当たったと思つてんのか」

ジュースを選択。

ドンと、ドリンクが落ちる。

松良 「祭り、今年も予定通り行われるんだってな」

結城 「松良……」

松良 「親父は死んだのに、この街は何も変わらない」

結城 「あんな——」

松良、遮り、

松良 「わかつてる。親父はきつと喜ぶ。天国からだんじり見て、笑うんだよ……」

ふっと嘲笑気味に笑みをこぼす。

6.

商店街（昼）

シャッター街の通り。

アーケードに激しい雨が打ち付ける。

松良、歩いている。その虚ろな目。

どこからか、だんじりの音が聞こえる。

松良の頬、ピクッと歪む。

7.

だんじり小屋（昼）

小屋の中に、大きな山車。

法被を着た男たちは、太鼓を鳴らし、笛を吹き、練習をしている。

その中に結城の姿。隅でバチを持ち、太鼓を叩く素振りの稽古中。

8. だんじり小屋近くの道（昼）

響くだんじりの音。

松良、傘も差さずにじっとだんじりを見つめている。
すると、松良の頭上を傘が覆う。

松良、振り向く。

竹邑芽依（18）、にっこり笑顔で松良を見つめて
いる。

芽依 「松良くん、お腹空いた。何食べる？」

9. 喫茶「もみぢ」・店内（昼）

こちんまりとした店内は、法被や団扇、ミニチュア
の山車など、だんじりグッズで溢れる。

テレビはだんじり祭りの映像が流れている。

窓際の席、芽依はハンバーグ定食にミックスジュ
ースの組み合わせ。

松良の手元にはコーヒーのみ。漠然と窓の外を眺め
ている。

芽依、ハンバーグをパクリ、

芽依 「大丈夫？」

松良 「うん」

芽依 「話したいことあったら話して。話したないんやったら、
全然。うちが面白話するから」

松良、芽依を見つめ、悲しそうな笑みをこぼし、

松良 「……この街に生まれた人間は、だんじりに生き、だんじ
りに死ぬ」

芽依 「え？」

松良 「昔親父に言われた。その通りになった」
店内を見る。

だんじりグッズだらけ。

松良 「嫌いなわけじゃない。ちゃんと悲しい」

芽依、ナイフとフォークを置いて、

芽依 「だんじり、嫌い？」

どこからともなく、だんじりの音が聞こえてくる。

松良 「ちよっと違う」

芽依 「嫌いやと思てた。関西弁使わんし、ずっと標準語やし」

松良、苦笑し、

松良 「……あの音を聴くと、うるさい、そう思うんだ」

芽依 「松良くん」

松良 「1年中ずっと。秋になるともつとずっとうるさくなって

……俺はだんじりに死にたくない。生きたくもない」

ポトツと松良の瞳から一筋の雫が落ちる。

松良 「だけどこの街は、親父の死を英雄扱いして、祭りを続ける。それが弔う唯一の方法だと信じてる。おか——」

芽依、被せて、

芽依 「おかしい」

松良、瞳を拭う。

芽依 「変やでな。でもうちはわかるっていうか。岸城に生まれて岸城で育ったから、だんじりはずっとそばにあったし」

松良 「だんじり、好き？」

芽依、こつくりと頷く。

芽依 「楽しいし。かっこいい」

松良 「それがきつと正常な心理だよ」

芽依 「せやけど松良くんが異常なわけやない」

だんじりの音が止む。

松良、外の景色を見る。

芽依 「逃げたら？」

松良 「ん？」

芽依 「この後どうなるん？」

松良 「一応、おばさんにお世話になるつもり」

芽依、真っ直ぐに松良を見つめ、

芽依 「東京行かへん？」

松良 「……東京？」

芽依 「大学は行くやろ？」

松良 「それはまあ……」

芽依 「いい機会やん。うち東京行く」

松良 「言ってたね」

芽依 「うちは逃げるんとかやうけど」

松良 「誘ってる？」

芽依 「誘ってる」

松良 「何で？」

芽依 「同級生やし」

松良、ぎこちなく笑みをこぼす。

芽依 「普通にひとりで行くん淋しいし」

松良 「……ありがとう」

芽依 「それどっち？」

松良 「考えとく」

と、コーヒーを啜る。

再びだんじりの音が響き出す。

10. 垂木家・和室（夕）

白木の位牌と写真立て。法被姿の葦地、腕を組み、カッコつけている。

松良、葦地の写真の前に正座している。

ただじっと、写真を見つめる。

11. 岸城駅・ホーム（昼）

だんじりの音がけたたましく響いている。
電車が到着。大勢の人が降りる。

12. 商店街（昼）

シャッター街の通りは人で溢れている。

13. 大通り（昼）

歩道には、所狭しと多くの出店が軒を連ねる。
多くの人でごった煮状態。
車道では「そーりゃーおーりゃー」の掛け声とともに、だんじりがゆっくりと進んでいく。
湧く観客たち。
芽依、ベビーカーステラ片手に満面の笑みでだんじりを見ている。

14. 道（昼）

人気がない通り。だんじりの音は響いている。
松良、すたすたと進んでいく。
ただ真っ直ぐに、前だけを見据えている。

15. 大通り（昼）

だんじりが急加速。

結城は後方で綱を引き、大声を出している。
歩道の芽依、結城に気付き、手を振る。

結城、ふっと笑みをこぼす。
すると、松良が芽依の隣にやって来て、

松良 「芽依」

だんじりは通り過ぎる。

芽依、松良にカステラを差し出し、

芽依 「食べる？」

松良 「1コだけ」

と、受け取り、パクリ。

芽依 「おいしいやろ」

松良、微かに笑みをこぼし、

松良 「……俺さ」

芽依 「言わんでもわかる。どこ目指すん？」

松良 「東京国際大」

芽依 「うちと一緒やん」

満面の笑み。

松良、去り行くだんじりを眺める。

だんじりは角を曲がり、松良の視界から消える。

（おわり）